



NISHI EYE HOSPITAL

西眼科だより 第10巻4号

(季刊誌)

2008年10月発行

編集責任者：倉橋美雪

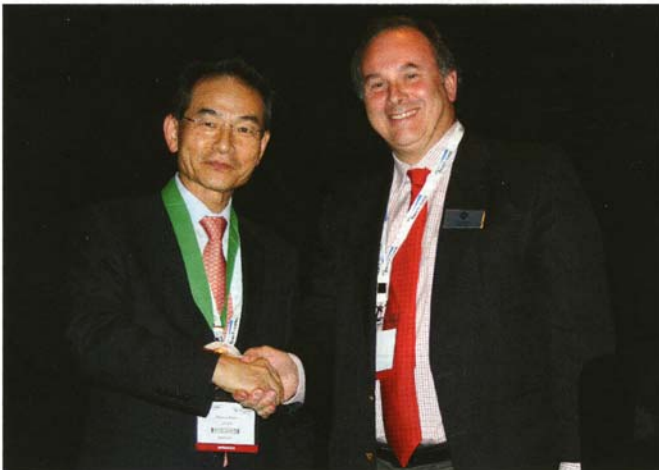
Nishi Eye Hospital

西眼科病院 〒537-0025 大阪府大阪市東成区中道 4-14-26 TEL: 06-6981-1132

〈ホームページ〉<http://www.nishi-ganka.or.jp> 〈e-mail〉office@nishi-ganka.or.jp

Ridley Medal Winner 2008

Ridley Medal 受賞



Okihiko Nishi MD, who delivered this year's Ridley Medal Lecture, receives his medal from Paul Rosen

西眼科病院 にし おきひろ 西起史院長は2008年9月15日ドイツ・ベルリンで開催された欧州眼内レンズ屈折手術学会(ESCRS)で眼科最高峰のRidley Medalを受賞し、受賞記念講演を行いました。

院長談：この賞にその名前が冠されている Harold Ridley は、イギリスの眼科医で、1949年、臨床的に世界で初めて眼内レンズを白内障手術後に眼内に挿入した人です。

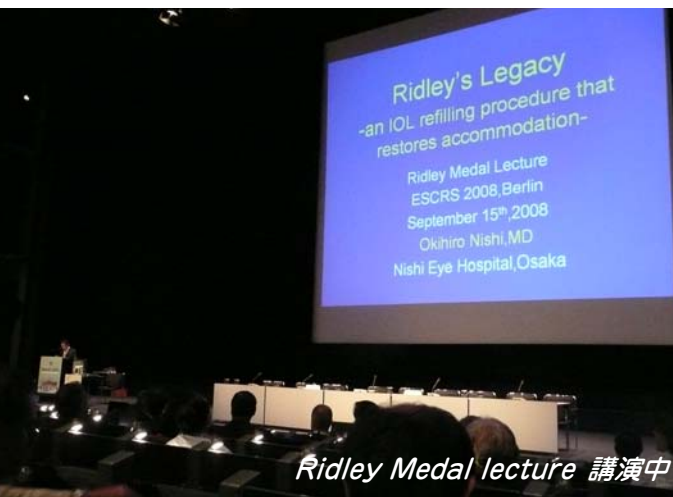
人体に異物を挿入すると、通常、異物生体反応が起きます。しかし Ridley 博士は、第二次世界大戦中、防弾ガラスの破片が眼内に飛入した戦闘機乗りを数人診察したことがあり、ガラスの破片は何年経っても異物反応を引き起こさないことを観察しました。これがヒントとなって彼は防弾ガラスと同じ材質のポリメチルメタアクリレート(PMMA)製の眼内レンズを作製し、眼内に挿入したのです。当初、この医療行為はイギリスの眼科学会や多くの眼科医の反発・反対、中傷・誹謗に遭い、Ridley 博士は、一度は挿入の継続を断念します。しかし、Ridley 博士は、この方法が正しいことを確信していました。その後、オランダ・米国で少しずつ眼内レンズに改良が加えられ、今日では、ほぼ100%、白内障手術後には眼内レンズが挿入されます。将に Ridley 博士の考え方が正しかったことが証明されたのです。今日では色々なタイプの実に多くの機能を持った眼内レンズが使用され、なお進化中です。この様な偉人の名前を冠した賞は、

毎年、白内障・屈折手術分野で基礎研究や臨床研究によって眼科学の発展に大きく寄与した世界中の眼科医の中から選ばれた1人の眼科医だけに授与されます。この様な名誉ある賞を受賞したことは(日本人としては2人目)大変名誉なことと思っています。

私の2つの臨床研究が評価され

た結果だと思っています。1つは眼内レンズのデザインに関するもので、円形の光学部の後方のエッジを直角(シャープエッジ)にすれば、白内障手術後、水晶体のカプセル内に残った水晶体上皮細胞が増殖して引き起こされるカプセルの混濁(後発白内障)が予防出来ることを病理組織学的に証明したことです(1998年)。この研究が眼内レンズのデザインに与えたインパクトは大きく、僅か数年の間に全世界の眼内レンズはシャープエッジのデザインとなりました。その結果、白内障術後の合併症である後発白内障は20~30%から一気に数%に迄下がったのです。よく“何故特許を取らなかったのですか?”と聞かれます。取っていれば今頃は億万長者、ハワイ辺りで悠々自適といったところでした。当時も周囲の人から特許を取るように勧められましたが、医学的なものに特許を取って不労所得を得ることに大きな抵抗を感じましたので、結局は申請しませんでした。しかし特許を取らなかったからこそ、僅か数年の間に全世界の眼内レンズがシャープエッジとなったとも言え、それで良かったと今でも考えています。皆さんの中にも眼内レンズを挿入された方が多数おられると思いますが、必ず光学部はシャープエッジとなっており、それにより後発白内障の発生が最少に抑えられています。

もう1つの研究は、もう30年にも渡って行っている人工物質による水晶体再生の研究です。現在の眼内レンズの欠点である単焦点を、自然の眼の様に、遠くから近く



Ridley Medal lecture 講演中

迄、焦点が合うようにする手技の開発です。この私の研究は NIH(米国の厚労省に当たる)から大きな研究費が出ており、米国の企業と共同研究しています。現在、九分通り完成させ、数年後には臨床応用という所まで、こぎ着けました。

詳細は又の機会に譲りたいと思います。



受賞メダル(裏・表)